

スポーツ運動学の今日的課題

金子 明友（筑波大学）

日本スポーツ運動学会「沿革」（設立10周年記念誌；12頁-24頁,1997より）

1. はじめに

今回、若手の方々が運動学の研究会をやるということで、私に何か話してくれと頼まれたのですが、重なる会議との調整がうまく合せられまして、ほっとしています。

スポーツ運動学といわれているものが、国際的にどういう内容になっているかということ余りうるさく言いますと、これはややっこしい問題を含んでいますので、今日はむしろ現在日本において運動学的な研究というものがどういう位置づけで理解されていて、何故我々がそういうものに対して意識を向けていかなければいけないのか、そういうようなことを中心にお話してみたいと思います。

このスポーツ運動学といわれているのは、もちろん言うまでもありませんが、スポーツ科学といわれるものの一つの領域であります。このことは世界的には常識になっているんですが、日本ではなかなかこれが定着しにくいところがあります。例えばバイオメカニクスはもともと生物学の一つでしたが、1950年代になってドンスコイ、ジュコフといったソ連の人たちによって、スポーツ・バイオメカニクスという形で我々の世界に取り入れられています。実は私は、1958年にモスクワの体育大学の人たちと初めてこのバイオメカニクスのことについていろいろ話す機会があったのですが、当時ソ連ではこれを相当重視しておりました。ドンスコイの有名な本がもうその当時出ていましたし、60年にはドイツ語にもなりました。それが日本にどういう経緯で入ってきたかということ、ちょうど東京オリンピック（1964）の頃ヨーロッパで世界のバイオメカニクスの会議があって、そこに日本を代表して、当時東大におられました猪飼先生が参加されて、世界的にはバイオメカニクスという形で研究が進められているというお話があったわけです。当時は日本では、アメリカから紹介されたキネシオロジーが全盛の時代でしたが、バイオメカニクスという形の方が世界的なコンセンサスを得ているんだという話をされたわけです。考えてみますと、日本海を越えて直接こっちに来ればずいぶん早く来ると思うんですが、アメリカでキネシオロジーといわれていたものが、バイオメカニクスという形と同調しながら日本にだんだん紹介されてくるに従って、日本でもこのような名辞を利用するようになったというわけです。いわばこういう学問体系というものは、地球を回る場合に、ヨーロッパからこっちの方に直接来ないで、大西洋をいったん渡ってアメリカ経由で日本に入ってくるという奇妙なことがあるわけです。

ちょっと話は変わりますが、最近ではアメリカでも"movement education"ということがよく問題になるようになって、ようやく日本でもそれが言われるようになったわけですが、これもその前はイギリスで、その前はやはりヨーロッパで、ずいぶん早くから"Bewegungserziehung"といわれていたことなんです。これなんかも、だいたいアメリカ経由で日本にやって来たものです。しかし残念ながらスポーツ運動学といわれている領域は、そういう経路を通過してくる経路がなくて、直接日本で翻訳されてしまったという関係で、

まだ現在でもそれが十分に理解されるころまでは行ってないのではないかと思います。ただ今回みなさんがお集まりになって、スポーツ運動学というものを中心に研究しようということになりますと、非常に画期的なことだろうと私は理解しています。

スポーツ運動に関する科学研究という形では、すでに18世紀ぐらいからいろいろな分野で行なわれています。けれどもその捉え方は、18世紀、19世紀ぐらいでは、まだほとんど既成科学を中心とした研究が主であって、それが人間の運動というものをどう考えるかという、そういった基本的な視点に立つまでにはやはり第一次世界大戦が終わるまで待たなければいけなかった、そういう事情があったわけです。第一次世界大戦が終わりましたのは1917年ですから、だいたい20年代ぐらいから人間の運動というのが特殊な意味をもっているということが理解されるようになってきたわけです。その前は、物質として、ないしは物体としての捉え方でした。生理学的な研究にしても物質的な、面からのみ捉えているし、力学の場合も、コールラウシュの研究に見られるように、物体として人間の運動を捉えている。その限りでは確かに人間の運動ではあるんですけども、人間がやった運動を物体として捉えていることになるので、厳密な意味では人間の運動ではないということが問題になりだすわけです。何故そういうことが問題になりだしたかということ、人間の捉え方そのものが変わってきたからです。人間の運動というのは、そういう一面的な捉え方ではどうすることもできないということがはっきりしてきたのです。人間はまず環界と関わりあい、人間をとりまくまわりのさまざまな状況に対して、主体として意志をもって、ある意味と価値を判断しながら運動するわけですが、そういう立場で運動というものを捉えることが是非必要だといわれるようになってきたわけです。それは先ほど申しましたように、20年代以降になります。

具体的な歴史的な経緯は、時間があつたらお話できるかとも思いますが、ここではまず第一に、スポーツ運動学という枠で取り上げられる運動というのは、他の運動とどこが違うのか、まあ一口で言えというのはこれは難しい話ですが、このことを端的な例をあげて説明しておきたいと思います。

2. 研究対象としての生命ある運動

我々が運動といっているものに、時間、空間の関わりというものは欠くことのできないファクターだろうと思いますが、この場合我々が普通考えているのは「物理空間」や「物理時間」と言われているもので、そういう形で我々はものを判断しているわけなんです。例えばミュラー・リエルの錯視の図があります。黒板がないですが、線分をこう二本引いておいて、一方の線分には両端に内側に向かって矢印が描かれていて、もう一方は両端に外側に向かって矢印が描かれている。この2つの線分の長さというのは、実際我々が見ると、矢印が外に向いている線分の方が長く見えて、内に向いている方は短く見えるというような、そういう錯視図があります。この例で考えると、我々のものの考え方が一番よく分ると思うんです。この場合、実際に見れば、必ずこっちが短くてこっちが長いと見えるんですけど、「実はそれは間違いですよ」というわけです。「それは、人間が誤ってそう見たんであって、本当は2つの線分の長さは同じですよ」ということになるわけです。「両方の長さが同じだということを、それでは何で決めましたか」と聞くと、「それは測ってみれば分るだろう」ということになる。すなわち物差しをもってきて測ってみたら、我々の目はごまかされていたことが分るということです。この場合に本当に正しいとされるのは、物理空間として捉えられた2つの線分の長さが同じだということなんです。

このことに非常に強い疑問をもちだしたのが19世紀後半のいわゆる現象学を中心とした人たちだということは、皆さんよくご存知だと思います。我々が正しいとか正しくないとか言っているその判断の基準というのは、すべて物理空間とか物理時間でものを考えているということ、これは日常生活でも全部そうだと思うんです。我々はいつも時計をもっている。これは物理時間で動いているわけです。しかしこれに対して運動をやっている時の我々の現実の運動の世界というのは、物理時間や物理空間で測って分るんだろうかという基本的な問題がそこに出てくるわけです。いわゆる時計で計ることができる時間の中で、座標系によって数学的に規定できるような、そういう位置の移動を我々は一般に運動と考えている。これは物理空間なわけです。これに対して人間の運動の理論を構築した始祖といわれるオランダのバイテンディク、この人なんかはそうじゃないんじゃないかということに気付いて、「運動空間」と「運動時間」という特殊な世界があるということを論じています。このような視点がいつも欠落しているのではないか。例えば行なわれた運動というものを物体としてないしは物質として捉えた場合には、確かに物理空間、物理時間という形でそれを判断することはできる。しかしそうじゃなくて、そこには体験される空間があり、また体験される時間がある。ドイツのチュービンゲン大学のポルノー教授はこれを体験空間ということで詳しく論じていますが、そういう「体験空間」、「体験時間」という問題について、我々は今までですと、それは物理空間、物理時間で測れないから、そういうことをいうと非科学的だと決めつけてしまうわけです。

例えばさっきのミュラー・リエルの錯視図の問題でも同じなんです、「2つの線分は本当は同じなんだ」、「だけど、こうやってごまかされるんだ」、「だから、それはまちがいだ」と我々は一般に理解するのです。しかし我々の運動している世界というのは、そういう物理空間、物理時間ではどうすることもできないものがあるということは皆さんはもう恐らくよく体験しているだろうと思います。これも分かりやすい例をあげたいと思います。ここには球技関係の人もたくさん来ていらっしやると思いますが、例えばフランスのメルロー・ポンティという有名な現象学者は「行動の構造」という本の中で、サッカーのことを例に出しています。有名な箇所ですが、タッチラインだとかペナルティーエリア、それらは単に物理的な区画ではないと言っています。それらを画す各々の線はプレーヤーにとっては一つの力線、力をもった線というものになる。それから例えば敵が2人いて、あるプレーヤーがその2人の間を抜くという場合、その間の距離というのは本当は物理的な距離なはずなのだが、しかしそのプレーヤーがそれをどういうふうな形で抜くとか、いろいろなことを考えた場合、それは単なる物理的な距離以上のものになってくる。そういう世界を我々はいつも見落としてはいないでしょうか。あらゆる競技でそういうことがあるわけです。確かにグラウンドに引かれているのは一本の線であり、物理的な空間を区画するにすぎない。その距離では、我々にとってそれは非常に低次の意味しかもっていない。しかし実際にはそれ以上の意味内容をもつことを我々は体験するから、我々の運動の構造もそこで変わってくる。タッチラインからボールを出さないようにするために、我々は運動をどう操作するかということを考えなければならない。そのときには確かに体験空間として、そのタッチラインを考えている。

もう一つ別な例をあげましょう。それは体験時間の問題です。ここに体操関係の人もしらっしやると思いますが、鉄棒で車輪から宙返りをして下りる場合、手を放してから下りるまでは約一秒位しかありません。単に物理時間としてはたったの一秒です。皆さんが今お座りになっていて、カチッという一秒を考えていただければ分ると思いますが、その時間

間隔というのは非常に短いものです。そんな間隔ではほとんど何の意識も残らないでしょう。ところが実際、空中に浮き上がって二回宙返りして一回ひねりを入れるということをやっていると、その間に運動している人はいろんなことを考えている。つまり一秒という物理時間の中では考えられないようなことが回転している中で起こっている。我々の運動の現実の世界というのは、そういう物理時間では分らないことがいろんな形で起こる。これに対して我々がそういう問題を取り上げようとする、それは単なる経験内容ではないか、体験内容じゃないかということになり、それは主観的なもので科学的じゃないということになってしまう。つまりその場合科学的じゃないと言っている、その科学的というのは物理空間と物理時間をベースとした自然科学の世界だけで論じていることになります。

我々運動をやっている者がどれほど多くの内容を体験空間や体験時間の中に捉え、タッチラインひとつからどれほど多くの運動を変化させる要因を受け取っているかといった、そういう構造の変化みたいなことはすべて投げ捨てられてしまう。選手をやり、現場にたかってコーチする場合には、このことがものすごく大切な内容になっているのに、それに対しては誰も問題にしようとはしない。たまたまそれを論じれば、非科学的だという一語のもとに押え込まれてしまう。それで我々は現場で選手を育て、子供たちの教育のために運動を教えるという。それでいいんだろうか。これはマイネルがしょっちゅう言う言葉なんですけれども、主体と環界があって、その積極的な対時の中で運動が生れる。主体があって、その主体がある意味と意図をもって何かをなそうとする。そしてそこであるやり方に価値を見出したからこそ選択がおこなわれ、あることに決断してそれを実行していく。そこではそういうような選択と決断が行なわれている。そういう人間の生命ある運動を中心に研究するのが運動の理論の世界だと思うんです。そういうことは人間学的運動学の中ではよく出てくると思うんです。皆さんもよくそういうことを聞いていると思うんです。

こういったことは別に新しいことではないんです。しかしただ一般的には人間の運動というものを捉える場合に、物理空間、物理時間という形で自然科学的な捉え方をします。そのことは非常に大切なことではあるわけですが、そういう非常に"sachlich"な、つまり客観的な形でそれを捉えるというのが一般的なわけですが、だが、そうじゃない一面、それを全部非科学的といって切り捨ててしまっているのか。そこに問題意識があるわけですが、ですからマイネルは理論と現場の間に大きなクレバスが、つまり断層があるということを指摘して、その断層をなんとかしようとしてあのライフワークをまとめたわけですが、そういう真意があまりよく伝わらない。マイネルのあの本には僕は僕なりに多少批判はあるわけですが、彼は共産社会にいたために言いたくも言えなかったことがある。できればもっとイデオロギーに抵触しないような形で、運動の真の姿を描き出したいと思ったんだろうと思います。それは実際にはむずかしかったわけですが、ですからマイネルの本を読んでいると、奥歯に物がはさまったみたいな文章がしょっちゅう出てくるんですね。はたして私の訳がそういうふうになっているかどうかは別問題です。そこまでのニュアンスを出すのはむずかしいものですから。彼にはやはりいろんな編集上の問題がらみで、委員会の方からプレッシャーがかかったりということは現実にあったわけですが、だから彼が本当に言いたかったのは、現場に立って生きた運動を指導し、生きた運動を学ぼうという世界では、体験空間とか体験時間とか、そういうものを全部ないがしろにしてしまっているとは思わないということだったのです。そういう形でこのスポーツ運動学というのは脚光を浴びてきたわけで、多くの賛同者を得たというのはむしろ現場の人たちからの賛同を得たわけですが、

3. スポーツ運動学成立の時代的背景

このことと関連して、1920年代から30年代という時代的背景について少しお話ししたいと思います。私は今年で還暦ですから、1927年の生まれなんです。ちょうどこの時出たのが有名なマルチン・ハイデガーの書いた「存在と時間」という素晴らしい著書です。すでにこの時に、これまで申し上げてきましたような人間の捉え方というものを、基本的に今までとは違った形で彼は世に問うています。世界内存在 "In-der-Welt-Sein" といいいますが、彼はこれによって、実存として、実際自分が生きているということを中心として物事を考えていく、存在を捉えていくということの大切さを述べています。これから非常に大きなサジェスションを受けて、大きく進歩をしたのが精神医学の世界なんです。1927年にこの本が出て、すぐにこれを消化して自分の精神医学の世界に導入したのが、有名なピンスワンガーです。今まで精神病といわれるいろいろな、分裂病とか、躁鬱病とかを具体的に効果的に治してゆく手立てというのがどうしてもみつからなかったのが、人間存在の本質に入ってゆくことを中心に捉えていって大きな成果をおさめた。それは現在でも世界的に非常に高く評価されている領域です。いろんな形で皆さんもこれを読んでおられるだろうと思いますが、日本の場合ですと、主として名古屋大学とか京都大学なんかにそういう研究を主張される人が非常に多く、実際の臨床例で大きな成果を上げています。ですから我々が子供たちを教え、選手を教える場合に、自然科学一辺倒でこのような大切な領域というものを全部ネグった場合に、はたして本当に効果ある指導ができるのか、実際にいい選手を育てることができるのかと考えるわけです。そういうことをよく捉えてくれるのは、この精神医学の世界だと思っているんです。

この考え方は一方では運動というものをゲシュタルトとして、つまり一つのまとまりとして捉えることに関係しています。1930年代に入ると運動というものを、今までみたいに力関係だとかスピードだとか、筋肉がどういう形で力を発現するかとかそういうことじゃなく捉えようとして、運動はひとつの緊密な構造をもっているということを言い出すようになって、これが有名な「運動ゲシュタルトの発見」につながるわけです。これは主としてライブツイヒ学派といわれる全体性理論の連中がやり遂げて、この人たちが運動にゲシュタルトを認めたのです。ご承知だと思いますけれども、ゲシュタルトというのは知覚理論から出てきたもので、例えば視覚ゲシュタルトというのは目で見た場合に、そこに一つのゲシュタルトが発生するということをいっています。このことは皆さん心理学で勉強されたと思います。聴覚ゲシュタルトの方は、例えばメロディーの場合、それぞれの音が高さを変えてもメロディーは生き残っているということによく説明されます。わかりやすく言うと、例えば今、編曲というのをよくやりますね。ジャズ風に編曲するとか。その場合、その本当の "Hauptmelodie"、つまり核になるメロディーはその中に残っているわけです。これは "Transponierung"、とあって、つまり「移調」の問題として研究されています。こういう知覚、つまり聴覚とか視覚とかにはゲシュタルトというものがあるということはかなり早くから研究されていましたが、運動にもゲシュタルトがあるということは本当に気がつかなかったわけです。そこをやったのがこのライブツイヒ学派で、その総師はクリューガーという有名な人なんです。クリューガーやクレム、その弟子のフォイクトとか、そういう人たちが中心になってこういう運動の研究をやっています。現在の我々のスポーツ運動学の中の主要な一番の根底にある考え方、つまり先ほど申しました精神医学の場合と同じような考え方がそこで出されたのです。

それ以外には、先ほどちょっとメルロー・ポンティの「行動の構造」のことを出しまし

たが、こういうフランスの哲学者たち、さらにピエール・ジャネのようなフランスの精神医学の人も含めて、現象学的な研究の中で運動と知覚と言語、そういうものを含めながら、これまでに申し上げましたような研究が非常に進んだということが挙げられます。この他に日本語で読めるものには「ゲシュタルトクライス」というのがあります。これはドイツのワイツゼッカーという人が書いたものです。知覚と運動というものの統一理論が出てこないかというんで書いたのが、この有名な「ゲシュタルトクライス」なのです。それから先ほどいったメルロー・ポンティは、運動の研究については相当の部分をさいております。例えば「知覚の現象学」の中にも、運動については相当の記述が見られます。そこでは身体図式の問題、これはベルグソンの運動図式と非常に関連をもったものではあるんですけども、それが扱われています。だいたい1940年代までにそういう研究がどんどん進んでいって、人間の運動というのはそんなに単純に分析できるようなものじゃないということが気付かれて、これまでとは違った研究がたくさん出てきてました。その後1948年に、つまり第二次世界大戦が終わった3年後に、オランダのバイテンディクという人が運動の一般理論を成立させたわけです。これが、いわゆるスポーツ運動学のルーツなんです。それをマイネルがスポーツ科学の方に引っぱただけで、ですから人間の運動の一般理論というのはオランダのバイテンディクという人に、遡ることができるわけです。ただ全部をバイテンディクがやったんじゃないで、先ほどから言っているように、精神医学の人たちの研究もあるし、心理学的な研究もあって、いろんなものがそこで総合されて運動の一般理論が作られたわけです。つまり、この時代の背景がそういう時代であったとすることができるだろうと思います。

残念ながら、この本は日本語に訳されてはおりません。アメリカでも出版されましたが、これはドイツ語のままです。英語には訳されていません。これはまさに人間の運動を研究する場合の牙城といわれているものです。難解な文章というかレベルが高いといった方がいいのか、その中味はフランス語、英語、ドイツ語が入り交って出てくるような文章で、非常にややこしいものです。これをスポーツの世界にもってこようとしたのは、大体ゲルマン系の連中が一番早かった。バイテンディクという人はオランダの人で、この本は最初にオランダ語で1948年に書かれたのです。それがドイツ語になったのが56年。この訳にあたったのは、デアポルトという有名な精神医学の人です。従ってスポーツ科学関係は、最初のうちはほとんどこれに関心をもっていなかったのです。ただこれがドイツ語になって出た途端にすぐに反応を起こしたのは、有名なオーストリーのマルガレット・シュトライヒャという人です。オーストリーでは1920年代以降に、ガウルホーフアとシュトライヒャという人たちが中心になって、"Natuerliches Turnen" という新しい体育の潮流を作っていますが、このシュトライヒャが一番早く反応して、それにいろんな書評を加えています。その中でバイテンディクにだいたい対抗しようと思ったのが、オーストリーには"Bewegungskunst" といって、まあ何と訳しますか、巧技とか巧みな動きみたいなそういうあるジャンルがあって、それを何故バイテンディクが取り上げなかったのかということとその書評の中で言っています。いずれにせよバイテンディクの本は56年にドイツ語に訳されて、ヨーロッパ圏で広く読まれるようになったわけです。

すでにこの頃にマイネルは、運動学の研究を着々とやっていました。有名な「運動学」という本の中の発達論に当たる部分というのは約10年間の実験結果から集約したものですから、その前から彼はこういうことをやっていたわけです。実際あの本の中でマイネルはバイテンディクのことをだいたい悪口をいってますが、イデオロギー上しょうがないだろうと思いま

す。いくらそうは言っているとしても、あの本の中の随所にバイテンディクには一目も二目も置いているのがよく伺えます。今では、私の拙い翻訳で申し訳ないんですけども、これは日本語で一応読むことができるようになっていきます。従って運動学といわれているものがスポーツに導入された最初のあたりの事情は、これで大体理解できるんじゃないかと思えます。大体この頃になって、こういった新しい運動理論というものが世界的に動き出したのです。この動きについては、今から10年前に大修館で出した「スポーツの科学的原理」に駄文を載せていますので、それでこの人間学的な立場をとった運動学というのはどういうものかというのはだいたい輪郭は掴むことはできるだろうと思えます。

あれはちょうど10年前、1977年でした。今は87年です。10年経ったわけです。この10年の間に大きな展開が起こって、今、運動の理論に関する研究は非常な広がりを見せています。ただ基本的なところは変わっていません。最近はとくにマイネルをもう一度見直そうというような気運が強くなっていますが、このへんの事情を概論的な形で読めるとしたら、チュービンゲン大学のウルリッヒ・ゲーナ-が書いた本や論文、ケルンの "Sporthochschule" のグロッサーだとか、ハイデルベルクのベーターゼンのものがあります。いずれも独文なので、なかなか消化されにくいということになりがちです。フランス話とかドイツ語が多いためにもどうしても日本人としてあまりなじめないの理解が遅れるということは、どうにもしょうがないかなと思えます。ただそんなことを言っているうちに、一番困るのは現場の指導者で、また一番犠牲を被るのも現場の選手ですから、できるだけ早くそういうふうな運動学を普及をして、皆さんの共同研究が実ればと思っているわけです。今までお話したのは、大体これは一年分か二年分の講義をいっぺんにまとめて、叩いて、脂が出なくなるようにしたエキスです。ここまでで現代の運動の理請、スポーツ運動の理論というのがどっちに向いているかというのははばご理解いただけたかと思えます。

4. 運動概念の問違性

ただここでちょっと一言、断っておきたいのは、今言ったスポーツ運動の理論というのは、いわゆる「運動諸科学」というものと別だということです。例えば運動というものを生理学的に考察し、力学的に見る、運動というものに心理学的にアプローチする、そういう運動の諸科学はたくさんあるわけです。それらのすべてには "Mutterwissenschaft"、つまり母体科学というもの、基になる科学があって、そこから見るのです。そこから見るあるいは見られているもの、つまりスポーツの運動というのは一体何なのか、そしてそのスポーツの運動そのものの理論というのは今までなかった。それに気付きたしたのは、今から半世紀前だったというわけです。一方日本では、この運動学というのはどう理解されているのかというと、これはまさに混乱の極に達しています。まあ簡単にこの辺をご理解いただいて、それで我々がどういう状況に置かれているかというのを考察してみたいと思えます。

ここで言っているのはスポーツ運動学といいますが、ちょっと語弊がありますのは、スポーツ運動学という時のスポーツという言葉で、これを競技スポーツだけと狭く捉えると、これはおかしくなってしまうんです。これは非常に大きく、まあユネスコでいっている意味でのスポーツと理解していただきたい。その意味では、すいぶん古くから言われている「体操、スポーツ、ダンス」という区分けではないわけです。今、文部省でも同じようなことがあって、ダンスはスポーツかなんてすぐに目くじらを立てる人がいたり、また体操もスポーツか、いやそうじゃないというような人がいたりします。それを全部とり込んだ形で、上位概念としてスポーツを考えていく。従ってスポーツ運動学でいう場合のスポーツとは、そういう広い

意味で促えていくわけです。

スポーツ運動というのは研究の対象になるわけですが、そうするとその外延構造といいますか、スポーツ運動じゃないものは何かという問いが必ず出てくる。その場合にスポーツ運動じゃないものとして、これはホンブルガ-の分類をマイネルなんかも引用しているわけですが、ひとつは"Arbeitsmotorik"というのがあげられます。つまり何かを生産する、ないしは何かを作業するために我々は運動するわけです。それからもうひとつは表現、まあ表現というところちょっと語弊があるので表出運動とっておきますが、我々は絶えずコミュニケーションする場合に、ある種の動作でコミュニケーションします。うちの孫はまだ一言、二言しかしゃべりませんが、ちゃんとボディランゲージを話します。どっちが先なのか、今非常に興味をもってはいるんですが、「欲しい」と思うと「ちょうだい」をする。何も喋れないわけですね。それで食べたいから、こうやって「開ける」って、こういうようなゼスチャーをするんですね。どこからああいうのが出たのかよく分らないんだけど、我々はそういうある身体動作というものをコミュニケーション、いわゆる意思の伝達とか疎通に使っているわけです。そういう一連の研究、これは主として表現心理学、"Ausdruckspsychologie"という街域で非常に研究が進んでいます。さらにもうひとつは、まったくの日常的所作、歩いたり階段を昇ったりといった、我々が生活するために用いる運動です。すでに上げた2つのカテゴリーに入らない、そういうたくさんの日常的な運動についてはすでに数多くの研究があります。大体この"Alltagsmotorik"といわれる日常運動というものを中心に、一番最初、運動学の芽生えがあったんです。つまりそれは精神医学の方から出てきたものです。精神医学の場合には、運動が非常に変わった形で現われてくる。歩くのも歩く格好がおかしかったり、その他のいろんな変化が起こる。それじゃノーマルな歩き方とは何か。そのためには何がノーマルで何がアブノーマルなのかという対比をしなければいけない。日常の所作、つまり歩くとか跳ぶとかいうような簡単な動作、そこに研究のメスが入られたのは、精神医学の世界だったわけです。体育の世界ではノーマルな人ばかり扱っているせいもあるんでしょうけれど、そのような問題意識まではいかない。とにかくスポーツというのは、広く捉えていただきたいということがまず第一のことです。

次に運動学という言葉についてお話しておきましょう。ここには懐かしい教育大の方々もいらっしやいますが、教育大学の時には体育学科とそれから健康教育学科と、後になって武道学科というのがありました。体育学科の中には学部内措置として、ひとつは体育学の5講座を中心とした体育学科といわれたものがあり、さらに体操、陸上、球技云々といった、残った5講座を運動学科とっていました。僕なんかは教育大学の時、運動学科の教官といわれていたわけですが、そこでは運動学という言葉が使われていたのです。その意味するところは非常に曖昧であって、いわば一般に僕みたいに逆立ちを教える者やら、かけっこを教える者やら、そういう人の教官の集団であって、そこに一つのまとまった理論があるということではなかったわけです。この筑波でも現に体育科学系のなかに運動学分野というのがあります。その運動学分野というのはどうあるべきかといっても、そこに共通の理解というものなかなかむずかしいだろうと思います。このことにはまた後で触れたいと思います。つまり運動を教える人という場合、そこで言っている運動というのはスポーツであったりダンスであったりというように、昔の古い考えに基づいた、いわゆる身体運動を中心とした理論と実技を教える先生の集団を意味しているわけで、そこでいう運動学とはそういう先生たちの集団であり、あるいはそういうものを教えるカリキュラムの構成体であったりということになっているわけです。

この運動といわれている言葉は非常にややこしくて、日本語の運動は外国のいろんな言葉に訳せるんです。例えば運動会という場合、運動会の運動というのは英語でどう訳すんですかと言われるとちょっと困るだろうと思うんです。体育大会、国民体育大会というのも例えば"festiva1 of physicaleducation"なんていったら、すいぶん変な訳になるだろうと思います。そういうところでは運動というのは、むしろ上位概念としてのスポーツみたいなものを考えているんじゃないかと思えます。それから運動心理学とか運動医学とか運動力学とか、いろんな言葉がありますが、この場合の運動というのも外国の場合だとスポーツサイコロジーという形で捉えるのが一般的になっています。そういう意味ではスポーツという言葉は非常に広く捉えられて、日本では全部それを運動で置き換えるという向きがある。例えばケルンの体育大学と我々は言っていますが、あれはケルンにある"Sporthochschule"ですから、スポーツ大学ということになるわけです。日本で「スポーツ単科大学」、あるいは「スポーツ大学」といったら、すいぶんなじまない言葉であることは事実だと思うんです。それから運動種目とかいっているのはみんな、サッカーとか陸上とかいうスポーツ種目であるわけです。つまり日本語で運動といわれている言葉は、外国語に置き換えてみると、いろんな言葉に置き換えることができる。それだけに我々はその間の意思の疎通をはかることがうまくできない。そういう問題とぶつかっているわけです。今ここで言っているのは、ドイツ語でいうと"Uebung"にあたる概念ですね。"Uebung"というのは繰り返し練習するような身体活動をいっているわけです。英語の場合の"exercise"、フランス語は"exercics"、ロシア語は"упражнения"、そういうのは全部、極めて教育的な意図に基づいて繰り返される一つの体系をもった活動をいっているんです。こういうものと、実際に場所を移動したりすること、我々が先はどから運動空間や運動時間の問題なんかでいっている"movement"、いわゆる"Bewegung"という概念とは全く違うことにお気づきだろうと思います。

これにはひとつの理由があったわけです。というのは明治、大正のころにもやはり当時のドイツから、あるいはヨーロッパからスポーツの研究がすいぶん入ってきたわけですが、それでも、そこで"Bewegungslehre"という言葉が出てくるんです。これはやはり運動学とか運動論と訳されています。それはほとんど生理学とか生物学だったのですが、ここでも運動学という言葉が出てくるわけです。さらに、このことは皆さんご存知の岸野先生が書かれた「スポーツ科学とは何か」という中で述べられています。運動学という言葉はオーストリーのガウルホーファがいった"Uebungslehre"、"Uebung"というのは"exercise"、"Lehre"というのは"theory"、と考えていただいて結構だと思うんですが、それを中島先生が「運動学」と訳されているんです。そこでいわれた"Uebungslehre"というのは何であるのかと辿ってみますと、戦前つまり第二次大戦前はドイツ語圏でさかんに"Uebungslehre"という言葉を使っているんです。例えばペックマンの"Sprtlexikon"を調べてみますと、"Uebungslehre"という言葉が出てきて、それに解説がついております。ここでは一体何を言っているのかというと、いろいろな種目を体育の時間に教える際に、サッカーがあったりいろいろな種目があるわけですが、各々の種目は一体どういう特性をもっているのかというようなこと、いわば種目の特性論みたいなもの、それからどういう順序で指導をしたら一番効果上がるのかというような指導方法の体系をいっているわけです。実際個々の教材になったものをどう教えたら一番うまくいくのか、それから授業全体としてそれをどう展開したら最も効果的に子供たちが運動を習得できるであろうか、こういうものを全部集めて理論にしてゆくというわけです。この理論が、先程いった人間の運動の一般理論と

いうものとは別な意珠で、"Uebungslehre"としてあったわけです。それが日本に入ってきて「運動学」と訳されたのですが、今いった指導法とか学習展開とか運動習得の方法論みたいなものは、現代ではそれを「方法学」という形で、つまり"Methodik"という言葉でまとめています。筑波大学にも運動方法学という一つのコアがありますが、そういうところで取上げる内容は大体"Uebungslehre"にあたるわけです。つまり日本で運動学ということがいわれたのは、先はどからいつている"exercise"を中心とした領域のことが中心になっていたわけで、日本で理解されている運動学というのは、運動の指導の計画や展開をどうしようとかというときに出てくる、運動方法学のことなのです。

5. 個別理論と一般理論

しかもこの運動方法学は個別にあるわけです。いくつも、いろんな種目がありますね。それは全部個別の方法学であって、それに共通な一般理論をまとめたものじゃない。つまり個別のものがあって、その集合概念として運動方法学があるだけなのです。それを運動学といっているわけです。ですから筑波大学の体育科学系でも、運動学というと各々の個別の種目の枠があるということになります。これは、歴史的にそうなっているわけです。そうすると、今まで日本で理解されていた運動学というのは、個別の陸上、水泳、サッカーといった、それぞれの運動種目の指導方法理論だということになります。ここで非常に問題なのは各種目が全部セパレートされてしまっているということです。その断層がすごく大きく、絶縁されているわけです。従って私は体操競技ですが、例えば体操競技の人とダンスの人とはまったく関係がなくなってしまう。柔道なんていうとまったく違う。各種目はもう、それぞれ独立の牙城を築いているわけです。それぞれの種目の人が別な領域の人とどういう関係にあるかということ、これはまったく絶縁状態であって何か口でもはさもうものなら、素人に何がわかるかという、そういう問題が出てくる。例えば、陸上の人が体操競技のことを云々したら、やったこともないのに何がわかるか、空中に上がって実際に宙返りをやってみなければ分るか、そんな意地悪いこと言ったりするのがおちです。それは自分のテリトリーを守る手段になります。このことは、同志を集める場合の一つの壁を作るのに非常に好都合であるというわけです。これは学会にもよく現れる現象です。学会でも、次第に分科会ができてくると、全部個別の方で聞きますということになってしまいます。学会の発表をご覧になっても分るように、全部その種目ごとにまとまっている。よそのものを聞きに行くということはずいぶん。共通の基盤もなければ、共通の話題もないので、同じスポーツ運動をやっている、それはまったく別の世界のものになってくる。

従って我が国で伝来ずっと伝わってきた運動学というものは、単なる集合概念であって、個別の運動方法学の羅列であり、その絶縁がどんどん進んでいってテリトリーを守ることになる。そういうことが非常に強くなって、ある徒弟集団が作られてくる。これはこれでいいと思うんです。恐らくこういう個別運動学の研究、もっとうるさくいえば、個別方法学といった方がよいんですが、そういうものの研究では日本は相当のレベルにあると思います。ヨーロッパなんかですと一般理論がまず出て、後から個別の理論が位置づけられるという、逆の現象がおこっているんです。日本はまったく逆になっているわけです。ここで困るのは、老舗か新参者かという喧嘩がおこることです。例えばポリバケツの蓋みたいなものを飛ばしてやるのもスポーツだということになると、名前はちょっと分らないんですが、それも一つのスポーツの方法理論として成立するということになります。そう

すると柔道や剣道といった伝来のものや、陸上競技みたいなもの、そういうものから比べたら、あれは成り上がり者だとか、新参者だとかいって跳ね除ける。それを全部包み込んで立っていけるとすると、個々の大学ではもうそれだけで何百人もの教授を要しない限り、とても対応できないということになってしまいます。どうしても老舗が頑張っ、あたらしい領域は小さくならざるを得ない。

昔の日本の大学というのはドイツの大学をひとつの参考にしています。例えば大学の講座を"Lehrstuhl"といいますが、それは教授の座る椅子のことを意味しています。つまり講座というのは、講義する人の座という意味です。素晴らしい教授がいて、大学で"Habilitation"（教授資格取得）というものによって、そこに一つの講座をもつことができる。日本の大学は大体そういう形で起こってきています。昔、教育大学の時には講座方式でしたが、筑波にきて講座がなくなりました。そうすると何かわけが分からなくなって、現在筑波の体育科学系には百人以上の教官がいますが、それが全部一頭だての馬車に乗ってそれぞれ勝手な方向に走っていくというようになってしまいます。だんだん変なことを言うといけませんから、このへんで止めますが、とにかく運動といっている個別種目が現在いくつ公的に認められるのかということを考えていただければ、それぞれがしっかり研究していくと、どんどんこれが増えていってしまい、そこでは必ず研究の積み重ねがある老舗の領域と新参者の領域とが喧嘩をするということになります。こういう形で現実には、例えば大学における教育とかいろんなことになりますと、問題が出てきてしまい、「運動学」としてまとめようということになる。結局、運動学という全体をまとめた一般理論がなくて、全部個別なんです。

よく大学の求人が来て、運動学をできるものと言っても、括弧書きで体操競技専門だとか陸上競技専門と必ず入ってますね。これはもう当然そうなるでしょう。この括り方も非常に難しいわけですね。結局いろいろな種目があって、そこに研究者なり教授がいても、その人たちは自分が運動の膨大な領域の中のどこに位置しているのか極めてところもとない。わしや体操だとか、わしや陸上だとかいって安住しようと思っても、その中では安住しても、よそとの比較でどうなんですかということになると、十把ひとからげにしようとするには膨大な三十以上の数になってしまう。つまり大海の中で小舟が漂っているみたいに、非常に不安定な形になっているわけです。我々運動をやっている者は、自分たちで自ら首を締めているんじゃないか。自分はどこに位置しているのか。いろいろな研究をやろうと思っても、それはどこに位置しますかといわれると、じゃあちょっと統計処理してこっちに行こうだとか、筋電図をとってこっちの方に行こうだとか、虎の威を借りてどこかに行かざるを得なくなってくる。それでやって行こうとしても、そんなの科学的じゃないなんか言われて、論文を突っ返されたりする。そんなもんでしょうか、我々のやっている運動というものは。最初にいった別な新しい運動理論が起こっているのに、そっちには目を閉じてどんどん絶縁が起こって行って、そのなかではテリトリーを守って安住しているかのごとく見えながら、実は大きな枠の中では行き場がなくなっていて、どこかでペーパーを増やさなければプロモーションができないということになって、どこかに寄り掛からなければいけない。そういう不安定な状態が起こっている。どうしてもここには、一般理論というものが必要になってくるんです。

私は、今、文部省の指導要領改訂の仕事をしてしていますが、そこでも分類論が出てくるわけです。いろんな形でなんとかまとめようと、いろんな種目をざっと並べてこれを全部、中学や高校の子供たちに学ばせるべきだというと、気にいらなくて、なんとか括ろうとす

る。その括り方がそれでは何で出てくるかということになると、極めて教育的な括り方になってくる。例えばマッキントッシュが1963年に出した本でみなさんよくご存知の競技、格闘技、あと克服ですか、ああゆう分類論がすぐに出てくる。そこでは陸上競技は克服じゃないという理由はどこにもないのに、器械運動だけは克服ですよなんてレッテルを貼られて、それで競争してはいけませんなんていう。競争するのがいけないんだったら、悪いところを直す必要はないわけなんです、先生はおまえは間違っているからもっとうまくやれとか、け上がりができないと点を下げるとか言うわけです。こんな馬鹿なことが起こっているわけです。つまり運動全体を、いろいろな種目のいろいろなカテゴリーに含まれている運動の全体をどういうふうに体系化するのか、大変さし迫った問題なのです。このことについて今までやってこられたのは、ほとんど教育学の方たちでした。しかし皆さんのように運動そのものをやっている人たちが、自分たちの絶縁の壁を破って、大きな立場に立って始めてそういうことを言うことができるだろうと思います。だから、恐らく皆さんは集まろうとしたんじゃないかと思うんです。

6. 運動諸科学と運動学

今申しあげましたのが、指導方法を中心とした理論だということはお分りいただけると思いますが、それを昔は「運動学」といっていたのです。その場合、指導方法を、つまりどう指導したらいいかということを考えだすには、何かないと出てこないわけです。何かに頼りたい、つまりその方法を生みだす基礎というのは一体どこにあるのかということになります。そうすると心理学的なこと、生理学的なことといった、いわゆる母体科学といわれるものに寄り掛かろうとする。これは確かに大切なことだとは思いますが。この場合、生理学だったら基礎医学系の生理学専門の人をお願いして、いろいろな研究を共同でやってもらうということになる。そういう人たちとの共同が必要になってくる。そうすると、こっちの方には運動があって反対の方には生理学があるわけですが、それではこの運動はどうなっているんですかと聞かれると、運動の人は体験したことがあって、そこにはいろいろなことがあるけれども、その理論体系がはっきりしていないということで、むこうに太刀打ちすることができないということになってしまうわけです。つまり運動そのものの理論というのは、まだ十分に理解されていないということになる。運動という世界があって、これに心理学的に、生理学的に、いわばそれぞれがバラバラにアプローチしているわけです。だんだんオーバードクターが増えてますから、専門的訓練を受けて本格的な研究をやった連中がスポーツの世界に入ってくる時代はもうくるだろうと私は思っています。それではこの人たちが入ってこようと思う、研究対象としての運動というのは一体何なのかということが問題になります。単なる個人的な経験の蓄積だということになってしまうと、せっかく立派な人たちとの共同研究というものもほとんど成立しないという、そういう問題が出てきてしまうのです。

運動そのものの理論、運動はどうなっているのか、人間の運動はスポーツをやる時にどういうふうに変化するのか、どういうような体系をもつべきなのか、運動の形態発生はどうなっているのか、こういったことはどう教えますかという時に必ず知っていなければならない - 般的基礎なのです。いろんな運動諸科学の人たちの応援を借りるにしても、自分がこれから研究しようとする運動がどうなっているのかという問題意識がなかったら、どうすることもできない。つまり先ほどから申し上げている、昔からあった方法学としての運動学に対して、ここにもうひとつ運動の中身そのものを研究する領域がないと、よそと共同

研究をしようとしても結局ダメになってしまう。それを諸科学の人たちが一步踏み込んで教えてやろうということになると、現場にいる人は、やっぱりあいつらは俺より頭がいいとか、数学が得意だとか、英語がうまいからといって、だんだん実技をやっている者が下を向いてしまい、それで後ろを向いてやけ酒を飲んで、あんなことやったってうまくなるか、あんなもの役にたたないんだというような愚痴もいいたくなる。

つまり我々がどう教えるかということに問いかける時には、自分の専門にしている運動は一体どうなっていますかということに、もっと学問的な目を向けるべきではないかということが問題になるわけです。バスケットならバスケットの人、柔道なら柔道の人、それぞれは僕みたいな逆立ち屋にはわからない、そういう体験の世界をもっていると思います。それを何故理論化しないのか。理論化しないでいて、どうして別な学問と協力ができるんだろうか。おそらくそこが一番の問題であろうと思います。従って昔からあった方法学としての運動学と、運動の中身をやる運動学というのは、かなり交差する部分をもっているわけです。絶縁しているのではなくて、交差しているのです。運動の構造と運動の方法は一つのまとまりをもった領域として捉えていかないと、本当は生きていけないのではないかと思います。それに対して、運動の諸科学はいろんな形で協力することができるであろうと思います。

これについては、おもしろい話があります。私は東ドイツの連中と仲がいいもんですから、いろんな話をするんですが、最初のうちはなかなか本音を言わない。しかしウオッカも相当な量が入ってくると、だいたい人間というのは本音を言うものです。東独ではスポーツ科学が進んでいるのは皆さんご承知のことだろうと思いますが、現場にいる連中が何を言うかという、「あいつらは何もわからない、我々の世界は独自だ、だから我々が教えてやるんだ」といったことです。胸を張って言うわけですね。相手はプロフェッサーで、自分は一介のトレーナー、いわゆる日本語でいうコーチではあるんですが、それで全然ひげめを感じないんです。ところが日本では逆です。これは間違いだと思います。現場にいて素晴らしいものを持っていながら、それをどっかに放ってしまっているんじゃないかと思います。これをうまくやっているのは、先程いった精神医学の世界です。つまりこの運動の中身の理論にあたる研究をしようとしたのが精神病理学の世界なのです。現象学的な、人間学的な立場に立って、そこから攻めていって具体的な方法として成果を上げているわけです。

ここまでで、はぼお分かりいただけだと思いますが、指導してゆく順序だとか、指導の体系だとかがどうなっているかということ扱う、従来の意味の運動学、今でいう方法学と、もう一方には運動の中身そのものをやるものがあるわけです。この中身そのものをやるもの、それがここで言っている運動学だということです。従って方法学をやるのに運動学を知らないということは成立しない筈なんです。例えば体操競技をやっている者にとっては、指導方法とは別に、体操にはいくつの技があって、それらがどんな構造をもっていて、どういうルールに対してはどのような変形が起るのか、あるいは車輪というのは多様に変形するわけですから、そういう研究をやる人がいないと困るわけです。

話はちょっと変わりますが、私が教育大の時に、東工大から共同研究してくれという人がきたんです。その人は車輪に非常に興味をもっていた。それで「先生は共同研究で何をやりたいんですか」といったら、「大車輪をやったら鉄棒にどのくらい力が加わるのか、それを知りたい」というんですね。そこで「それは車輪の研究じゃないんじゃないんですか」と私が言ったら、「大車輪でぐるぐる回った時に鉄棒がどうなっているのか、力を調べたい」というんです。例えば僕だったら65キ口あるから、65キ口の人形を回したって、だいたい同じものが得るわけです。車輪というものにはいろんな種類がありますが、どの車輪か、それもどの技から

どうやった時の車輪かによって、車輪というのは本当に変容してしまいます。その内のどれを研究なさるんですかといったら、最後にその先生は、そのような関心ではなくて、つまり体操競技の中の間人がやっている車輪を研究するのではなくて、鉄棒というある回転点の中心を物体が回った場合に、何キロの場合にそれにどのくらいの加速が生じて、どのくらいの力が加わるかということに興味があるんだといわれた。結局、噛み合わなかったということですね。こういう事はよくあるんじゃないかと思います。私も当時助教授で、若くて鼻っぺしからも強かったものですから、だいぶその教授とやり合ったわけですが、こういうことを考えてみますと、我々が運動の中身そのものをもう一回、考え直さなければならぬんじゃないかと思うわけです。運動そのものの構造はどうなっているのか。先程もちよっとお話ししましたが、運動というものはひとつのゲシュタルトをもっていて、それがどのような構造をもっているのかということをもっと真剣にとらえる必要があると思います。それから、実際に運動が行なわれると、我々はそれを時間、空間の関係で見ることができません。しかし同時に、運動をやっている人は、いろんなことを運動意識として捉えることができるわけです。ですから、運動は外から見ただけでは分らない。中からも運動を捉えなければならぬわけです。そういう立場から、運動を研究することができるわけです。

7. 方法学と運動学

現実に我々が教師としてないしはコーチとしてやっている場合には、いろんな指導の側面というものをもっている。例えば、コーチということに例を引いてお話ししたいと思います。この子のトレーニング・プランをどうするか、この子の身体の状態をどういうふうにつまみか、意欲を失ったらそのコンサルタントをどうするか、そういうような、いわば選手を育てるのに必要な、いろいろな管理的な内容があるわけです。今日はどれだけの量を、何を何本やらせて、何種目やらせて、どれだけの時間をとって、さらに一週間はどうかといったことです。マトベイエフの周期論の研究のようなものは、こういうふうなところをベースにして出てくるわけです。授業研究の場合にも、同じことがいえると思います。導入があって、中があって、まとめがあってというような、授業全体の展開をどうかということが出てくるのだと思います。従ってここでは授業管理といえますか、トレーニング管理といえますか、そういうことを中心とした知見、いろんな知識を我々は数多く学び取らなければならないということで、これは絶対に必要なことであろうと思います。すでに申し上げてきましたような、"Uebung"あるいは"exercise"に関わる指導方法論というのは、このことを中心としてやってきたわけです。

ところが運動そのものをうまくさせたいとか、間違っている時に直したいという時に、我々コーチまたは教師は子供たちにどれほど多くのことを教えられるのかということを考えていただきたい。アメと鞭といった仕方でやれば、言葉は一つも発しなくてもできるとすれば、それは動物の調教と一緒にだということです。運動を教えようとする、どうしても相手の感覚に入り込んでいかないと教えられないわけです。教えている場合にうまくできない子供は、いっぱいいます。私は身近な連中と雑談しているときによく話しますが、そういう場合、我々教師ないしコーチはたいていはまず「あの子は鈍い、あれはダメだ、体力がない」だとか言うわけです。それで何故教えられないのかということは余り考えない。その場合、教えている自分がいかにみじめかということを知っているだろうと思うんです。だけどそれはやっぱり表面に出したくないわけです。しかし例えば精神

医学の連中の場合、本当にとてつもないことを言うてくる患者がいて、それにお医者さんが対峙している場合に、この患者が、例えば今ここが二階の部屋だとしますと、あそこに敷いてある線路が下からグーンともりあがってきて、この患者の頭の中に入っていくんだというようなことを言った時、お医者さんが「おまえ馬鹿なことを言うなよ、おまえアホじゃないか」と言ったら、その患者の治療は成功しないと思います。同じような選手や同じような子供がいないでしょうか。そういう子供がいるときに、我々は「おまえは鈍い、おまえはバカだ、おまえは筋力が足りない」ということで、管理的なことだけやってなんとかごまかしてしまう。それで後は鞭とアメでやって、できたら、「それみろやっぱりわしの言う通りだった」というわけです。とはいっても実際その子供は、自分で試行錯誤してやったはずなんです。その内容に教師は全然立入ることはできない。はるか離れて立っている。冷めた顔で見ている。顔だけはいかにも同情したような顔をしているけど、本当は分らないんじゃないか。つまり、精神医学の連中は悩み抜いて、医師というのは、患者が客体であってはいけないんだということに気付いたわけです。それは、いわゆる自然科学者が物質なり、物体を見るのとは別だと気づいたわけです。

これまでの我々の科学というのは、客観に対して、こっち側に主観があって、それでこの主観から客観をみていくんで、この主観をできるだけなくすような形で、いい研究ができるんだと考えていた。ところがシュトラッサーという人は、このことは人間の科学に関する限り通用しないと断言しています。そういう物理過程として研究するのは別であって、そうじゃない場合には、こっちの主観とあっちの主観の間に、チャンネルが通じないとしたら、どうしてこの病人を治すことができるのか。そういうことについて「間の理論」ということを主張しているのが、名古屋市立大学の有名な木村敏教授です。一連のものをお読みになった人もいらっしゃると思いますが、彼らがどれほど患者のことを親身になって治そうとしているか。それにひきかえ我々体育教師、あるいはスポーツコーチというのは管理コーチだけやって、実際の運動そのもののコーチに踏込もうとしても踏込めない。とすると運動の中身の研究は随分遅れているのではないだろうか。そういう意味で運動の理論というのはどうしても欠かすことはできないというふうに理解されてきているのです。それがだいたい1930年代から40年代にかけてだったのです。ですから今、日本で、まだ87年ですから遅くはないと思うんですが、まだ気がついてない国も随分あるだろうと思いますので、こういう形でこの運動の中身という問題を捉える必要があると思います。

このことは個々のスポーツそれぞれから出てくる筈なんです。何も陸上をやってる人が体操競技の研究をする必要はないと私は思う。陸上をやってる人は、陸上の、例えば三段跳びなら三段跳びで悩めばいいわけです。ただ本当にその中身まで突っ込んで悩んでいるかどうかは別問題です。加藤澤男先生が目の前にいるから言うんですけれど、加藤先生と話していて彼がよく言うように、できない子がいると、その子の頭を開いて何を考えているのか見てみたいというような、それほど変なこと言ったり、何度言っても分らない子供がいるというわけです。その子供たちに対して、我々は何ら手を差しのべることもできない。もしも我々が精神医学の世界にいたら、とっくにクビになっているでしょう。幸いなことに別に精神異常でない連中を教えているせいか、我々に都合の悪いときには隠れ蓑を沢山もっているんです。都合が悪くなるとひょいと隠れてしまう。別の方へ逃げていく。まあ、それでも月給は貰えますから。だけど良心はどこか痛んでいるのではないのでしょうか。そんな痛みを感じずの人が皆で手を取り合ってゆく必要があり、現実の子供たちの運動の世界、我々が指導する世界に対してもっと真面目に取り組んでみる必要があると思うん

です。

そこには"Problem"が、つまり解決しなければならない問題があるはずなんです。それを"Problem"といいます。それは単なる"question"、単なる"Frage"、つまり疑問をもっているということではなく、解決すればどういうところにどう役に立っていくのかがはっきりしている問題、それもつかめないんじゃないんです。論文を書く時に問題意識とか"Problemstellung"というのは、何が解決されるべきかを掴むということなんです。我々現場というのは、それを解決するために努力してるわけなんです。ですから個別のそういう問題意識があって、個別の中で皆さんで話しをする。そしてその個別を越えて、それを話すチャンスがあつたら何年後にできたら素晴らしいだろうと思うんです。もう時間ありませんが、この個別の実践例というものをもっと自信をもって発表すべきじゃないかというのが、皆さんに対する私の提言でもあるわけです。学問的な体裁を整える。それは確かに大切ですが、あまりにも一方的に学問的とか科学的ということに恐れをなして大切な本質問題を見過してはいないでしょうか。

このことに関しては、ニュートンとゲーテの有名な色彩論の論争がありますが、あれと同じわけです。ゲーテがニュートンに対して、光が七色であるというようなそんなバカなことを言う奴はおかしいといって、論戦をたたかわしたわけです。150年以上も経って、今、自然科学のトップクラスの人たちが、ゲーテの認識の仕方というものを、ゲーテの独創的な自然科学というものが潜んでいるんじゃないかと気がつきだした。ゲーテから一世紀半以上も経った今日においてです。我々は現実にはいろいろな体験をもち、いろいろな所産をもっているけれど、一言、それは科学的じゃないといわれて、それらが全部潰されてしまっているのでしょうか。それが先生方に対する私の訴えなんです。潰される必要はないと思います。主観というものを非常に大切に、はじめて運動の世界というものがある。現象学というのは主観の世界から始まって、ああいう広大な理論体系ができたわけです。我々の運動の世界の場合に、歯の浮くような客観性という言葉で現場が解決できるのなら、誰も苦労しないでしょう。自信をもって実践例を発表し、それで討論してゆく。ただ主観的なことがその人にしか分らないというのでは問題があるでしょう。「あっ、そうだ」という人が二人になり、三人になり、これは皆が共通にもてるなというところまで高められなければならない。いわば共通項の抽出というのは、我々の世界の大きな努力目標じゃないかと思うんです。

そういうことは随分たくさんあると思う。もしもそれが不可能だとしたら、け上がりは19世紀半ばにできたんですが、今から100年以上も前にできたこのけ上がり、世界中どこの国に行ってもけ上がりという技があるということにはならなかったと思うんです。ベルリンの郊外でたった一人の人がやった、そのコツが、「ああ、ワシもこんな感じだ」、「ワシもこんな感じだ」という共通項ができて、それが伝わって行って世界に広まっていた。こういった大切なことを、どうして我々は放っておいていいのか。つまり個別の問題から一般理論に昇華する、一般理論に引上げて行く努力が必要であり、その努力は必ずそれはまた個別理論に還元されてくる。こういう形で、個別理論と一般理論というのは協力していかななくてはいけないだろうと思います。あくまでも個別に凝り固まると、最後は自分の首を締めてしまうことになり、スポーツ科学の中でも、本当に運動を大切に、運動に生きてるような人たちが研究者としては常に窓際に置かれるということになってしまう。そういうことは不本意だというのが僕の今日の主張なんです。後の内容的なことは、遂次、研究会なり、いろいろなところで、お互いに深めていけるだろうと思います。出発

点として、そういうイデーを理解していただければ幸いです。以上で終わります。ありがとうございました。